

---

# まじっく快斗 - ブレイジング・スターの巻

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まじっく快斗・ブレイジング・スターの巻

### 【Zコード】

Z4564A

### 【作者名】

コーリ

### 【あらすじ】

学校の帰り道に宝石強盗団を叩撃したコナンは、スネイクに誘拐されてしまった！怪盗キッドこと黒羽快斗が、コナンを助けに向かうのだが……。

オレの名前は江戸川コナン。帝丹小学校1年生だ。だけどオレ、本当は、高校生探偵、工藤新一なんだ。謎の組織に毒薬を飲まれ、こんな体にされてしまつたつてワケ。

オレは今まで、数々の難事件を解決してきた。その中で、信頼できる仲間に会えた。元太、光彦、歩美ちゃん、服部、哀ちゃん。心強い仲間達だ。

そうそう、親友というよりもライバルと言つた方が正しいのかもしれないが、もう1人、怪盗キッドというマジシャンがいる。なぜかコイツとは、深い絆で結ばれてるんだよな。そして今回も、その彼に助けられる事になる……。

ある日、オレは学校が終わると同時に、走り出していた。本日発売の推理小説を買つためだ。一応予約してはいるけど、早く読みたいからな。

オレは本屋で図書での本を買つと、ランドセルに本を入れ、店を後にした。しばらく歩くと、宝石店が目に入った。

コナン

「哀にプレゼントする指輪でも見ようかな？」

オレがそう思つた瞬間、店から3人の男が飛び出してきた。宝石強盗団だとわかつたが、オレはその男達の服に目がいった。

コナン

「く、黒ずくめ…」

どうも、黒い服を着ている人を見ると、すぐに黒の組織に結びつけてしまつ。オレの悪いクセだ。哀が転校して来た時に遭遇した偽札事件の時も、かんちがいしてしまつたからな……オレは頭をかいだが、それどころではない事に気づいた。オレは、強盗団と曰が合つてしまつたのである…!!

男A

「見たな、オマエ……」

コナン

「あ……あ……」

オレはすぐに逃げ出した。当然、3人は追つてくる。しばらくして、オレは男達をまいたと思い、安心した。だが……。

男B

「見つけたぜ……」

男C

「逃がさねえぞ……」

コナン

「そ……そんな……」

オレは逃げよつと、後ずさりした。しかし、その時……。

コナン

「うつ……」

オレは後ろから口をハンカチで塞がれ、羽交い締めにされてしまった。

コナン

「むぐぐ……うう……」

ハンカチにクロロホルムが仕込んであつたらしく、オレは一瞬にして氣を失ってしまった……。

それからじぱりとして、やつとオレは田が覚めた。

コナン

「うう～ん……クラクラする……わしき薬を嗅がされたせいかな……」

…

起き上がろうとしたオレは、自分の状態にすぐ気がついた。

コナン

「か、体が……」

そう、オレは、手も足も体も繩でグルグル巻きに縛られてしまつていた。これでは、身動きがとれない。

コナン

「な、なんで……？」

オレは、自分が誘拐された理由が宝石強盗の現場を見たからだとう事に気づいた。

「ナン

「そんな……でもただそれだけの理由だらつか……？ん？」

何や、話が聞こえる。オレは会話がする方に、体をかたむけた。  
じまじかすると、会話が聞こえてきた。

スネイク

「ガキに見られるとはじめじつたな。で、ちゃんとビッグジュエル、  
ブレイジング・スターは手に入れたんだりうな？」

「ナン

「エ、ビッグジュエル？」

オレは小声でつぶやいた。

男A

「はい、ちゃんと手に入れました。」

スネイク

「！」ぐるりつた。あのガキは、組織に連れ帰つてから始末する。

「ナン

「！」

オレはふるえていた。このままじゃ殺されてしまう……。オレは、  
快斗に電話をしようと決意した。転がった反動でイヤリング型携帯  
電話を取り出ると、急いで電話番号をブツシコした。

「ナン

「快斗……お願ひ……早く出て……」

同じ頃、江古田高校にいる快斗は……。

快斗

「今日も仕事だったよな……なんていう宝石だつたっけ……？」  
快斗が頭をヒネっていると、快斗の携帯電話が鳴った。

快斗

「ん？ 着信……？」「ナン君からだ……」

ちなみに快斗は「ナンの正体を知っているのだが、学校内なので「ナン君」と言っている。授業中だったので、快斗は小声で電話に出た。

快斗

「もしもし……」

快斗の耳に入ってきたのは、「ナンのSOSだつた。

コナン

「快斗、助けて……！…ボク、宝石強盗団に誘拐されちゃつたんだ

……」

快斗

「な、何だつて？ 宝石強盗団！？」

快斗は驚きながらも、小声で話した。

快斗

「それでオマエ、今どこにいるんだ？」

コナン

「古い倉庫みたいな所だよ……」

快斗

「オマエをさらつたのは、どんなヤツだ?」

コナン

「ボクが追つてる黒の組織と同じ、全身黒ずくめの男……あ、そうそう、リーダーっぽい人がスネイクって呼ばれてて、ビッグジュエル、ブレイジング・スターっていう宝石について話してたよ……」

快斗

「ビッグジュエル!! スネイク!! !!」

コナンの言葉から、快斗はコナンを誘拐したのがスネイクだと確信した。

快斗

「オマエ、動けるか?」

コナン

「うん……手足を繩でグルグル巻きに縛られてるけど、なんとか動けそう……」

快斗

「よし、そこから何か見えないか?」

コナン

「うん……何か見えそう……うつ……」

快斗

「コ、コナン君！？」

快斗は思わず、大声を上げてしまった。青子、紅子、恵子、探、クラスマート全員が反応した。

青子

「ど、どうしたの？ 快斗……」

快斗

「コナン君がさらわれた……」

青子

「ええ！？ コナン君が！？」

快斗

「先生、すいません！ 黒羽快斗、友達を救うために早退します！！」

快斗は得意のマジックで、ポンッと消えた。紅子はそれを見て、急にタロットカードをきり始めた。タロット占いだ。

紅子

「出たわ……正義のカード……でも、なんだか不吉な予感がするわ……先生、私も早退します！」

紅子はそう言つと、ホウキを取り出し飛んでいった。

ところで、コナンはあの時どうなつたかというと、電話をかけていたのをスネイク達に気づかれ、再びクロロホルムを嗅がされて眠ら

されていた。

スネイク

「ちつ……余計な事をしやがって……」

スネイクは「ナンのイヤリング型携帯電話を足で踏みつぶした。

スネイク

「おじオマエら、『イイツの口を塞こでおけ!』

部下

「はい!」

部下達は「ナンの口に布を巻き、口を塞いだ。

快斗

「新一君がスネイク達に誘拐されまつなんて……くそ!待つてろよ、必ず助けてやつからな!…」

快斗は家に戻ると、手早くキッドに変身した。そして、屋根からハトを放ち、自分も外に飛び立った。

コナン

「ん~、ん~……」

コナンは倉庫の一室に寝かされていた。

キッドは屋根に着地した。ハトに、コナンが監禁されている倉庫を探させているのである。数分後、ハトが戻ってきた。

快斗

「そうか、わかつた……待つてろよ、新一君ー。」

同じ頃、紅子はホウキで空を飛んでいた。といつよつ……道に迷っていた……。

紅子

「あ~ん、道に迷った……ビーブショ……よし、いつなつたら……」

紅子は魔女の特権、魔法で快斗の居場所を探った。というか、最初からそうすればよかつたような……。紅子、意外に天然ボケである。

キッドはコナンが監禁されている倉庫に近づいていた。キッドは赤外線スコープで、犯人の人数を確認していた。

快斗

「ボスのスネイクに、部下が3人か……これならいけるな。いくぜ、  
閃光弾！！！」

キッドはコナンがいるにもかかわらず、倉庫に向かつて閃光弾を投げた……。閃光弾が破裂した。

スネイク

「な、何だ！？」

男A・B・C

「閃光弾みたいです！」

スネイク

「ちい！いつたん外に出るぞ！」

一方、コナンは……いきなり倉庫に光が射したので、当然のことく反応していた……。

コナン

「ん~！~？」

コナンが悲鳴を上げたその時、窓が割れてキッドが入ってきた。

コナン（か、快斗！）

快斗

「『メンな、コナン君……オレのせいで……大丈夫か？』

快斗はさつ言ひと、コナンを縛っていた繩と布を取った。

快斗

「で、ビッグジュールはどう?」

コナン

「うる……」

ビッグやらスネイク達、闪光弾に驚いて外に出た時に宝石を回収し忘  
れたらしく……。

快斗

「ド、ドジな……」

コナン

「それより、ここから逃げようよー。」

快斗

「あ、そうだったな。変身ー…あ、逃げるべー。」

スネイク

「フ、やつと見つけたぞ怪盗キッド……」

快斗

「ス、スネイク！！」

スネイク

「ここで死んでもらおう……」

快斗

「そりはいくか！」

快斗はトランプ銃を撃つた！部下3人は倒れた。

スネイク

「バカめ、オレにそんなモノは効かん……」

快斗

「な、何！？」

スネイク

「死ね、キッド！……」

コナンと快斗は田をつぶつた。……と、その時……。倉庫に閃光が走った！

スネイク

「ぐ、ぐわ！？」

スネイクはひるんだ。そのスキに、コナンと快斗は脱出した。

快斗

「大丈夫か、コナン君。」

「ナン

「うん、大丈夫……でも、いつたい誰が助けてくれたの……？」

紅子

「私よ……」

快斗

「紅子……？」

「ナン」と快斗の前に、小泉紅子が立っていた。

紅子

「それより快斗君、月が出てるわよ。」

快斗

「あ、そうだった。」

快斗はブレイジング・スターを月明かりにかざした。しかし、パン  
ドラは入っていなかつた。

快斗

「これもハズレか……残念だな……ナン君、君からこれを中森警  
部に渡しといってくれ！」

コナン

「うんー。」

「ナンは快斗から宝石を受け取った。その後、快斗が通報していた

警察に誘拐犯は逮捕されたが、スネイクという男はすでに逃走していた……。この事件で、オレと快斗の絆はより深まつた。そして、スネイクと怪盗キッドの攻防戦は、まだ続いていくのだった……。

(後書き)

コナン君、無事に助け出されましたね。しかし、快斗のあの性格は直した方がいいのでは……？と思う私です。タイトルにあるビッグジユエル、ブレイジング・スターに、深い意味はありません。楽しんで読んでくれたらうれしいですので。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4564a/>

---

まじっく快斗 - プレイジング・スターの巻

2010年10月21日07時14分発行